第４９３回　史跡めぐり

平成３０年１０月１４日（日）

サイコーな越ヶ谷宿を再考

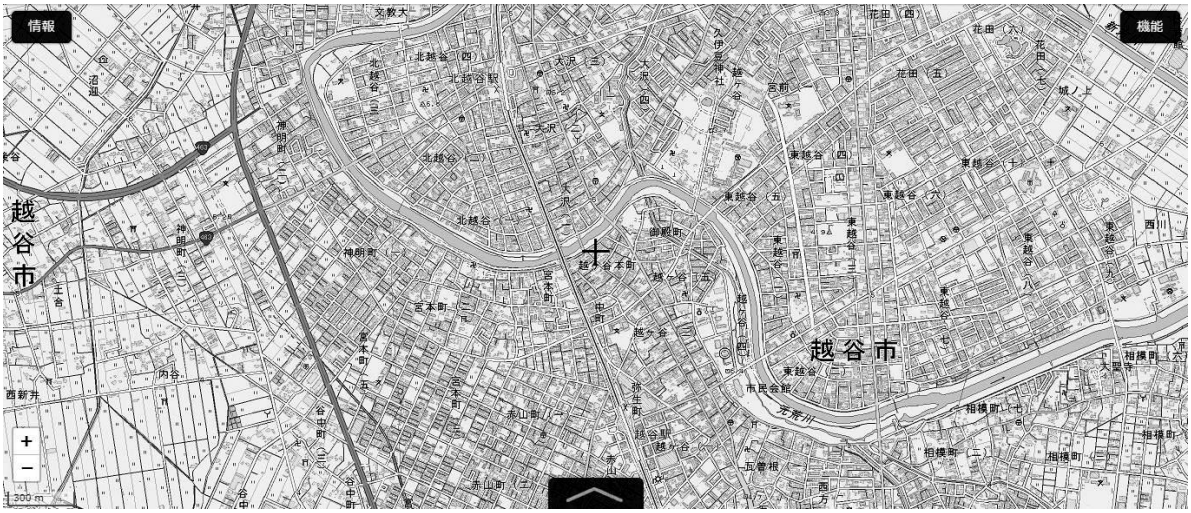
伊豆半島産の石材を使った建物を見ながら、
サイコーな越ヶ谷宿を再考して歩きます。

画：高橋 誠一

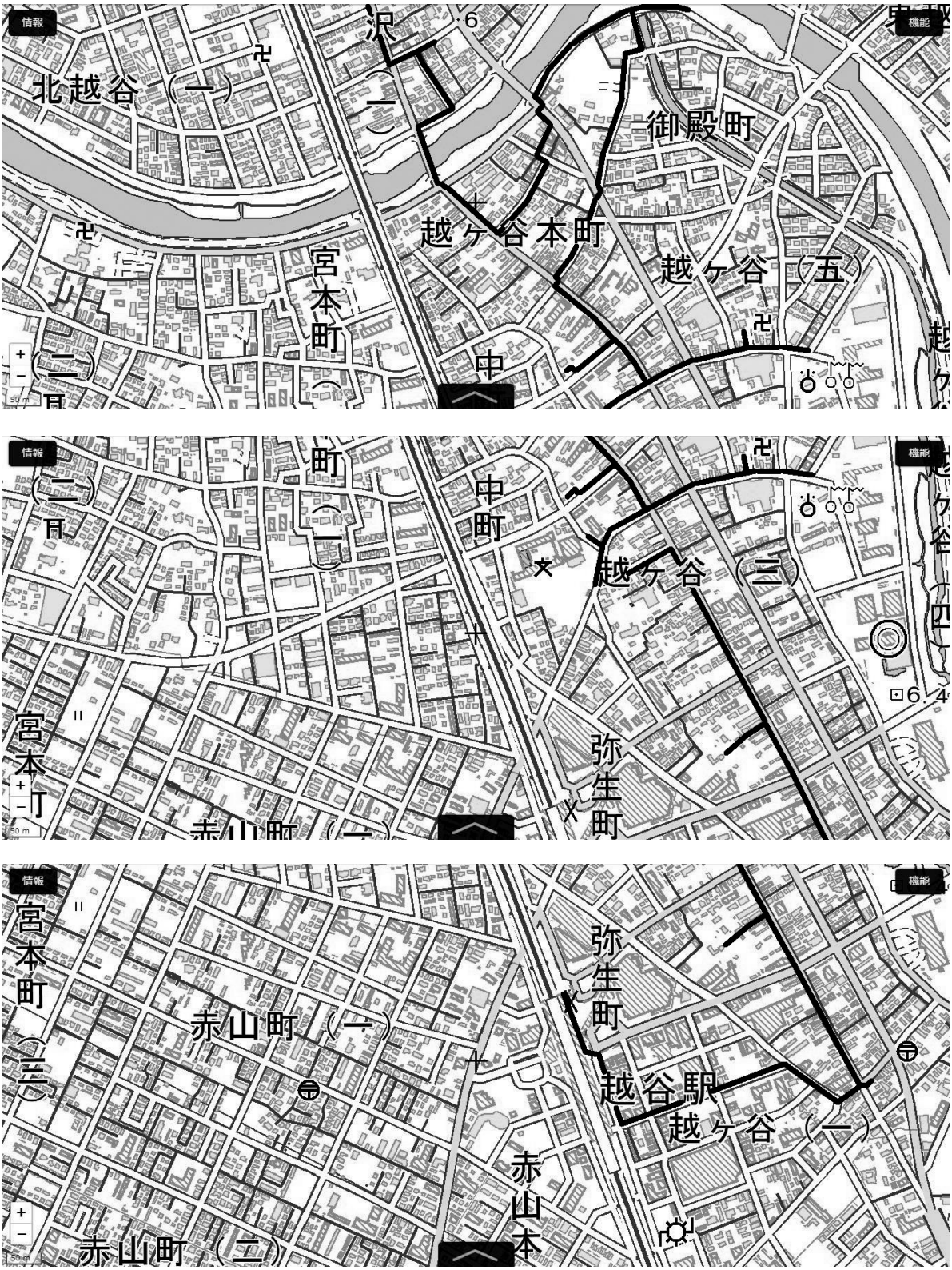
◎案内者　常任理事 秦野秀明 理事 尾川芳男・小林憲子

実行委員 逢見 俊人・根岸 広・舩岳 知康

NPO 法人 越谷市郷土研究会



国土地理院「地理院地図（電子国土Web）を加工して作成



国土地理院「地理院地図（電子国土 Web）を加工して作成

○　東武鉄道「越谷駅」東口に集合　午前８時３０分

順路　全行程　徒歩 約4.8㎞

①　旧越谷市役所跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
②　東正院跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
③　不動道追分：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
④　新町八幡神社・澄海寺跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
⑤　観音横丁観音堂：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
⑥　コシガヤホシクサ発見推定地：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
⑦　中町浅間神社：旧埼玉郡 四町野村
⑧　袋町通り・御殿表通り：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
⑨　越ヶ谷御殿跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
⑩　建長板碑：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
⑪　神明社（市神社）：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
⑫　大橋際河岸跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿
⑬　本陣跡・鷹番小屋跡：旧埼玉郡 大沢町
⑭　東武劇場跡：旧埼玉郡 大沢町
⑮　問屋場跡・脇本陣跡：旧埼玉郡 大沢町
⑯　照光院・天神社跡：旧埼玉郡 大沢町
⑰　光明院：旧埼玉郡 大沢町
⑱　大沢香取神社：旧埼玉郡 大沢町
⑲　「往古奥州道」推定地

東武鉄道「北越谷駅」東口で解散　午後０時頃

※　出典は以下のように、略して記しました。

①『新編武蔵風土記稿』は『**風**』

②『武蔵国郡村誌』は『**郡**』

③福井 猷貞『越谷瓜の蔓』（『**越谷市史 第四巻 史料二**』に収録）は『**瓜**』

④福井 猷貞『大沢猫の爪』（『**同**上』に収録）は『**猫**』

⑤江沢 昭融『大沢町古馬筥』（『**同**上』に収録）は『**馬**』

⑥『往還諸御用留』（『**同**上』に収録）は『**留**』

⑦「文化七年（1810）五月　四町野村除地等書上」

（「大門会田家文書」県立文書館蔵）は『**会田**』

⑧加藤 幸一「大沢町・越ケ谷町石仏」は『石仏』

※　⑧は、「NPO 法人 越谷市郷土研究会」ホームページに掲載。

『**風**』では、「**越ヶ谷宿**」について、以下のように書かれています。

（（　）内の文字は、加藤 幸一氏が加筆しました）

○　**越ヶ谷宿**　※「越ヶ谷領」に属します

越ヶ谷宿は日光及び奥州街道宿駅の一つにして、古は騎西庄に属し、越ヶ谷町と呼しが、**延享四年（1747）**より宿と唱ふ、江戸より行程六里、古は下にの（載）する大沢町は自ら一村なりしが、其後、年代詳ならず当宿（越ヶ谷宿）に属し、越ヶ谷町・大沢町の二ヶ所を合せて一宿とすと云、次立（継立）の人馬は五十人、五十匹の定数をもて、互に十日を限り（十日交代で）、草加・粕壁の二宿、其（人馬の）余、吉川町及鳩ヶ谷・大門・岩槻の宿々へも次立をなす、依て（継立を取り扱っているので）、**元禄八年（1695）四月**、酒井河内守検地せし時より、一町一反六畝二十歩の地子（地代）を免除せらる、宿の四隣、東より巽（南東）は瓦曽根村、南は七左衛門村、坤（南西）は谷中村、西は四町野村、北は花田村、艮（北東）は小林村なり、東西二十町半、南北九町余、用水は須賀村溜井を引沃げり、家数五百四十九、多くは街道の左右に連住す、当所、**文禄の頃**より毎月二七の日（二日、七日、

十二日、十七日、二十二日、二十七日の六斎市）をもて市をなし、時用（自用の意か）のものを交易す、（江戸）**御打入**（天正十八年の家康関東入国）の後より御料所にて、今も然り、新田は**享保十七年（1732）・宝暦十一年（1761）**の二度に検（検地）して高入とす、

高札場　乾（北西）の方、往還（街道）の内、境 板橋（現・大沢橋）の側（南西のたもと）にあり、

小名　本町　中町　新町

○　「越ヶ谷駅停車場新設記念」の石碑

正面：「**越ヶ谷駅停車場新設記念**」　裏面：「**大正八季 期成同盟会**」

左側面：「**勲八等 池畑 確男書**」

大正九年（1920）四月十七日、「**越ヶ谷駅**」開業。

昭和三十一年（1956）十二月一日、「**越谷駅**」に改称。

昭和四十七年（1972）、「石碑」を**越ヶ谷久伊豆神社境内**へ移設。

平成年二十三年（2011）十一月、「石碑」を**越谷駅駅前広場**へ再移設。

①　旧越谷市役所跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

昭和二十九年「越谷町」誕生後の**昭和三十年**竣工の**「越谷町役場」**の跡で、**昭和三十三年「越谷市」**誕生後の**最初**の**「越谷市役所」**の跡でもあります。

②　東正院跡・薬師堂跡・稲荷社跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

「東正院」について、『**風**』では「東**西**院（「東**正**院」の**誤り**）」として、宗教宗派は**当山修験**、（旧）江戸 青山**鳳閣寺**の配下、**医王山**の山号、本尊は**薬師如来**であり、坐像長一尺三寸、恵心（僧都）の作であることが書かれ、『**郡**』では書かれていません。

『**瓜**』では「京都**三宝院**袈裟下**修験**東正院」、「**当山修験**東正院之義、古来ゟ境内ニ**薬師堂**有之、［**後略**］」と書かれています。

『瓜』により租税(そぜい)の免除された「除地(じょち)」であることが判ります。

「稲荷社」について、『風』では名称のみが書かれ、『郡』では書かれていません。

『瓜』により租税(そぜい)の免除された「除地(じょち)」ではないことが判ります。

○　寛政二年（1790）青面金剛像庚申塔

　　不詳　　青面金剛像庚申塔

　　宝暦二年（1752）青面金剛像庚申塔

　　文化元年（1804）子安六地蔵石幢

　　文政十年（1827）「秋葉大権現」文字塔（出典：『石仏』）

※　越ヶ谷一丁目十一番地の南東角地は、現在は「栃木銀行」の駐車場となっているが、かつてはここに薬師堂があった。この薬師堂あたりが江戸時代の東正寺（本尊は薬師如来）の跡地であろう。（出典：『石仏』）

※　かつてはこの地に地蔵堂があったが、現在は堂そのものが取り壊されて、明治二十九年二月に再造立された地蔵尊（地蔵菩薩立像）露呈している。その像の蓮華座からの高さは百六十センチである。（出典：『石仏』）

③　不動道追分(おいわけ)：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

○　江戸期「越ヶ谷宿村絵図」（越谷市立図書館蔵 絵図類の部 資料番号 42）

（解読者：加藤 幸一 監修者：鈴木 秀俊）

「カハラソね」、「境(さかい)石はし」の記載があります。

○　「日光道中分間延絵図(ぶんげんのべえず)」

「越ヶ谷宿」×2、「新町字薬師前石橋」、「紀伊殿鷹場(たかば)口御料所傍示杭(ほうじぐい)」の記載があります。

○　寛保元年（1741）道標付き不動明王像（出典：『石仏』）

※　日光道中（現在の栃木相互銀行越谷支店）から瓦曽根溜井に向かって北東に進み、溜井に突き当たって右に進む道が吉川道（よしかわみち）である。大相模の不動尊（大聖寺）や吉川に通じる。

（出典：『石仏』）

※　この道標は、元は日光道中と吉川道（大相模道）との交わる角地に南西向きにあった。日光道中沿いから瓦曽根溜井寄りに移動したのである。

（出典：『石仏』）

④　新町八幡神社・澄海寺跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

「八幡社（**新町八幡神社**）」について、『風』では文和二年（1353）と彫られた「板碑」が「ご神体」であることが書かれ、『郡』でも同様のことなどが書かれています。

『**瓜**』により租税の免除された「**除地**」であることが判ります。

澄海寺について、『風』では宗教宗派は**羽黒行人派修験**、（旧）江戸 日本橋音羽町**普門院**の配下、本尊は**大日如来**であることが書かれ、『郡』では書かれていません。

『**瓜**』では「羽州**羽黒山法漸寺**末**天台澄海寺**」、「**澄海寺**之義、**天台派羽黒山法漸寺**末**修験**之由、古来ゟ 右之所ニ罷居、[**後略**]」と書かれています。

『瓜』により租税の免除された「**除地**」であることが判ります。

天神社、稲荷社について、『**風**』では名称のみが書かれ、『**郡**』では書かれていません。

『**瓜**』により租税の免除された「**除地**」ではないことが判ります

⑤　観音横丁観音堂：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

『**風**』では**天嶽寺**の持ち、本尊は**観音菩薩**であり、坐像長一尺一寸八分、伝教大師（最澄）の作であることが書かれ、『**郡**』**では書かれていません。**

『**瓜**』により租税の免除された「**除地**」であることが判ります。

○　享保六年（1721）青面金剛像**庚申塔**

　　昭和八年（1771）「馬頭観音」文字塔

　　文化十年（1813）道標付き「馬頭観音」文字塔

文政五年（1822）**徳本行者**の名号塔

嘉永四年（1851）「弁財天」文字塔

嘉永七年（1854）青面金剛像**庚申塔**（出典：『石仏』）

※　「**観音堂**」は、現在も**天嶽寺**の管理下にあります。（出典：『石仏』）

※　武蔵国新四国三十三箇所観音霊場の一つで、**二十七番**にあたった。
（出典：『石仏』）

※　戦時中に越谷に置かれた「防空監視所」は、最初はこの寺院の境内にあったが、後に柳原も元荒川河川敷に移転する。
現在の「埼玉県警察本部 交通機動隊東部方面隊」施設内の北側である。
（出典：『石仏』）

⑥　コシガヤホシクサ発見推定地：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

○　「コシガヤホシクサ」発見の経緯（けいい）

○　昭和 13 年（1938）9 月

前川 文夫氏が、

旧・越ケ谷町附近の「元荒川」の「**砂州上**（さず）」で**発見**しました！

○　同年（1938）10 月末（24 日）

佐竹 義輔氏が、

同地をお訪れ、果実を多数つけた標品を多数**採集**しました。

○　昭和 14 年（1939）10 月発行

同氏が、

『**植物研究雑誌**』第十五巻 第十号

に「**新種**」として**発表**しました！

⑦　中町浅間神社（浅間社）：旧埼玉郡 四町野村（せんげん）

『**風**』では**迎攝院**（こうしょう）の持ちの「**浅間社**」であることが、『**郡**』では「**木之花咲耶姫の命**」が祭神であることなどが書かれています。

『会田』、『瓜』により租税の免除された「除地」であることが判ります。

○　中町浅間神社（浅間社）「懸仏」

懸仏は、神社の鏡や曼荼羅の月輪に由来する円形板の中に、神の本地仏を浮き彫りにしたもので、御正体ともいう。平安中期の神仏習合の信仰から生まれた。鎌倉期から室町期にかけて社殿等に吊り懸けられ、さかんに拝まれたことから、この名がある。［**中略**］ 本面は、当浅間神社に祀られていた。明治維新の廃仏毀釈の際、捨てられていたものがたまたま拾われ、［**中略**］ 平成十七年（筆者注 2005）より久伊豆神社に預け保管されている。

（**出典：**谷岡 隆夫（2009）「中町・浅間神社の懸仏」
会報『古志賀谷』第 15 号）

○　中町浅間神社（浅間社）「懸仏」の「銘文」

中町浅間神社の**懸仏**は、**直径 24.4 ㎝、木胎銅板製**、表側に富士山の形が陽鋳され、裏側の木部に、以下のような**墨書名**があります。

「敬白／**奉納**　富士山内院御正体／（**梵字**）南無浅間大菩薩／**上野介 満範**／**別当**／本云**応永三十二年乙巳六月一日**／**叡蓮**」

「于時**文明八年丙申六月一日**／**別当中納言阿闍梨良清**／**満範孫子**

○　中町浅間神社（浅間社）「懸仏」の「事実関係」

①**応永三十二年（1425）乙巳六月一日**、
「中町浅間神社」に「**懸仏（現在のものではない）**」を「**奉納**」したのは、**上野介 満範** である。

②**同**時点の、「中町浅間神社」の「**別当**」は、**叡蓮**である。

③**51 年後**の**文明八年（1476）丙申六月一日**、
「中町浅間神社」に「**懸仏（現在のもの）**」を再び「**奉納**」したのは、
「中町浅間神社」の「**別当**」でもある**中納言 阿闍梨 良清**である。

④**中納言 阿闍梨 良清**は、**上野介 満範**の「**孫子**」である。

⑤「**孫子**」とは、「孫」又は「子」の意味である。
（秦野 秀明の定義）

○　奉納者**上野介満範**は鎌倉府奉公衆**野田満範**の可能性が高い

奉納された富士山内院の所在は不明であるが、奉納者**上野介満範**は鎌倉府奉公衆**野田満範**ではないだろうか。

「**野田系図**」（註１）によると、**満範**は**上野介**で、「持氏御代始ノ時使節、応永廿六年（**筆者注** 1419）御遷宮奉成、法名**義山**」と注記がある。野田氏は『**鎌倉大草紙**』に「嘉慶元年（**筆者注**　1387）丁卯五月十三日、**古河**住人**野田右馬助**囚人一人搦進す」とあることから、鎌倉府御料所**下河辺庄古河**に知行所をもっていたことがうかがえる。

また、**満範**の子**持忠**は足利成氏の奏者を勤めており、おそらく成氏が**古河**入城したころは、**古河城**主であった。**懸仏**の**上野介満範**が**野田満範**であれば、**満範**は**鎌倉**と**古河**の間を往来したことは十分に考えられ、当然、利根川を航行した可能性も高い。もし、利根川流域に**浅間社**が勧請されていれば、浅間信仰をもった**満範**が**懸仏**を奉納したことは否定できないであろう。［**後略**］

※　（註１　鷲宮町編（1983）『鷲宮町史　史料編四　中世』）
（出典：**武井 尚**（1993）『中川水系Ⅲ　人文』）

○　「熱田大宮司」としての藤原（野田）満範を証明する史料

応永七年（1400）三月廿九日
「熱田大宮司藤原（野田）満範開闔職補任状」→「大宮司藤原朝臣（**花押**）」
応永七年（1400）四月十六日
「熱田大宮司藤原（野田）満範楠木社禰宜職充行状」→「（藤原朝臣）（**花押**）」
応永十九年（1412）二月二日
熱田大神宮奉納「蓬莱鏡」背刻銘→「大宮司の職名で奉納」
応永二十年（1413）～二十二年（1415）

「応永二十～二十二年条」『熱田宮年代記』→「大宮司**満範**」

応永三十年（1423）十一月十三日

「連歌懐紙」→「社務上州**満範**」

（出典：熱田神宮宮庁編（1983）『熱田神宮文書 千秋家文書 上巻』p. p32-34）

○ 木戸 将監 満範

「**同時代**」に「**同名**」である**将監 満範**という人物が、**野田氏**の「**同族**」である**木戸氏**に存在していますが、**応永二十三年（1416）**に起こった「上杉禅秀の乱」の最中、**同年十月十日**に伊豆国「国清寺」にて自害しています（出典：『鎌倉大草紙』）ので、**九年後**の**応永三十二年（1425）六月一日**に、「中町浅間神社」に「**懸仏**」を「**奉納**」した**上野 介 満範**とは、「**官途**」も異なりますので、「**別人**」と考えるのが妥当と思われます。

（秦野 秀明の仮説）

⑧ 袋町通り・御殿表通り：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

ご興味のある方は、以下の「NPO 法人越谷市郷土研究会」のホームページをご参照下さい。

加藤 幸一（2015）「越ヶ谷御殿周辺の古道」

http://koshigayahistory.org/150930_k_goten_kk.pdf

⑨ 越ヶ谷御殿跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

『**風**』では、「**越ヶ谷御殿跡**」について、、以下のように書かれています。

（（ ）内の文字 及び ※の文章は、加藤 幸一氏が加筆しました）

御守殿蹟　宿の亥の方にあり、慶長の頃（1596～1614）よりの御殿なりしが、明暦三年（1657）江戸の回禄（火事）にて、御城の内も焼失ありしより、御仮殿にかの地（江戸城内）へ移させられ、其蹟御林となり、当所の民小林（「小杉」の誤り）藤左衛門・浜野 藤蔵二人御林守たりしが、元禄八年（1695）検地の時.

貢税の地となり、御膳所の跡のみ御林を存せり、今に御守殿蹟又権現林ともいへり、

※　現在の「御殿町」の名称は、越ヶ谷御殿がそこにあったことに由来する。越ヶ谷御殿は明暦の大火で焼失した江戸城の仮の御殿として移築されたという。越ヶ谷御殿跡の御林守（御殿番）の一人が小杉 藤左衛門であるが、その墓石が今も天嶽寺の無縁仏群の墓地の中（最後列北西隅）にある。

○　「越谷会田氏」の来歴

越谷会田氏の事実上の祖である**会田出羽資清**の子**会田出羽資久**は、越ケ谷宿を開発し、支配を徳川家康から任された人物ですが、その祖先は清和天皇に繋がる滋野氏から分かれた（裏付け史料なし）信濃の豪族海野氏で、鎌倉時代前期には、さらに**会田氏**や真田氏などに分かれました。（「信州滋野氏三家系図」）

しかし、**越谷会田氏**の故地と比定される現松本市の「会田五ケ郷」は、応永七年（1400）頃には既に、同じく海野氏から分かれた岩下氏（会田岩下氏）（「信州滋野氏三家系図」）が支配していて（『大塔物語』）、**越谷会田氏**の祖先である**会田氏**は、行方知れずとなっています。

天文十九年（1550）、小笠原長時の三男である貞慶は、岩下氏（会田岩下氏）と真田氏のそれぞれの主君であった武田晴信により信濃国を駆逐されました（『高白斎記』）が、天正十年（1582）の武田氏滅亡後に徳川家康に仕え、小笠原旧臣の支持を得て深志城（松本城の前身）を奪還し（『信府統記』）、同年、現松本市会田郷に侵攻し、武田氏旧臣であった岩下氏（会田岩下氏）を、滅亡に追い込ませました（『四賀村誌』）。

現松本市の「会田五ケ郷」を去ったと推測される**越谷会田氏**の祖は、**会田将監幸久**の代で関東に下り後北条氏に属していたよう（「会田家系図」）ですが、**将監幸久**の子**会田出羽資清**は、太田下総守に属していたよう（「寛永諸家系図伝」で、「寛政重修諸家譜」）、岩付城主であった太田美濃守**資**正（三楽斎）

から、後に**越谷会田氏**の「通字」となる「**資**」の字を授けられました（「会田家系図」）。

会田出羽資清の子**会田出羽資久**は、後北条氏に仕えますが（「寛政重修諸家譜」）、天正十八年（1590）、後北条氏没落後に関東に入国した後に、越ヶ谷地区に度々鷹狩に来ていた徳川家康に拝謁し、慶長九年（1604）には、自らの屋敷地の一部を「越ヶ谷御殿」の敷地として提供しました（「寛政重修諸家譜」、「会田家系図」）。慶長十三年（1608）五月十八日には、徳川家康より屋敷地として畑一町歩を賜り（「慶長十三年伊奈備前守忠次指添状」）、元和五年（1619）七月十六日に亡くなり、越ヶ谷天嶽寺に葬られました。

会田出羽資清の子孫たちは、その後も越ヶ谷地区の礎を築き、今日（こんにち）の越谷市の発展に寄与しました。

（以上の文章は、

山崎 善司（1977）『越谷会田氏の研究』

http://koshigaya-kkk.sakura.ne.jp/469.pdf

山崎 善司（1985）『越谷会田氏のルーツを探る』

http://koshigaya-kkk.sakura.ne.jp/468.pdf

を、秦野 秀明が**要約**した後に**大幅に加筆**しました）

⑩ 建長板碑（けんちょういたび）：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

○ 越谷市内で「鎌倉時代」に建立された「板碑」

1．建長（けんちょう）元年（1249）己酉 145×54 ㎝（下欠） 旧越ヶ谷宿（現御殿町）

2．正和（しょうわ）元年（1312）三月 88×26 ㎝ 旧大竹村東養寺（とうよう）

3．文保（ぶんぽう）元年（1317）八月 63×23 ㎝ 旧恩間（おんま）村渡辺家稲荷社

4．元亨三年（1323）八月 60×22 ㎝ 旧小林村

5．嘉暦（かりゃく）元年（1326）十一月 66×20 ㎝（下欠） 旧四町野村（しちょうの）久伊豆神社

6．嘉暦二年（1327） 38×19 ㎝（下欠） 旧大松村清浄院（しょうじょう）

7．嘉暦三年（1328）七月 75×26 ㎝ 旧大竹村東養寺（とうよう）

８．嘉暦三年（1328）十一月 75×25 ㎝（下欠） 旧西方村金子家稲荷社
９．元徳三年（1331）二月 45×22 ㎝（下欠） 旧小林村東福寺
１０．元徳三年（1331）二月 30×16 ㎝（下欠） 旧小林村東福寺
１１．正慶元年（1332）十二月 41×19 ㎝（下欠） 旧小林村東福寺
１２．元弘三年（1333）十一月 75×22 ㎝ 旧西方村金子家稲荷社
（出典：「越谷の板碑」『越谷市史 第一巻 通史上』p. 385）

⑪ 神明社（市神社）：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

『**風**』では「神明市神社」として、嘉吉二年（1442）に勧請され、正徳年中（1644～47）に「橋台」という地へ移転されたことが、『**郡**』では嘉吉二年（1442）正月七日に須藤 十太夫 貞俊により勧請されたことなどが書かれています。

『**瓜**』では「**市神神主**古来ヶ**勘太夫**と申、代々**吉田派**免許ニ而**神職**相勤、［**後略**］」と書かれています。

『**瓜**』により租税の免除された「除地」であることが判ります。

○ 文政八年（1825）「水神」文字塔（出典：『石仏』）

⑫ 大橋際河岸跡：旧埼玉郡 越ヶ谷宿

河岸名：**大橋際** 所在地：**越谷市越ヶ谷** 河川名：**元荒川**

成立年代：**宝永八年（1711）**

備考：舟車 **川下小船十九艘** （出典：『**郡**』越ヶ谷宿 p. 102, 103）

（出典：遠藤 忠（1993）『中川水系 人文』埼玉県 p. 474, 475）

［**前略**］ また**瓦曾根堰の河岸場**も堰があるために中継ぎの要衝で、**宝永八年（1711）**の**年貢津出し**の運賃は、新曲輪河岸～**瓦曾根**、末田～**瓦曾根**、三野宮～**瓦曾根**、**大橋**〆切～**瓦曾根**、四丁野～**瓦曾根**（以上**越谷市**）、

そして**瓦曾根**から江戸までと定められ（**原田家文書**）、**瓦曾根河岸**を基点に年貢米中心の元荒川の水路運輸が盛んであった。

岩槻藩領内の元荒川筋の辻・新曲輪・須賀・末田河岸場は、新曲輪町名主原田氏の差配下にあった。

原田氏は、岩槻藩の**御舟方掛**として**御抱船**を藩より預かり、藩領の**年貢米**の廻送を一手にひきうけていた御用商人であった。**御抱船**は**上船、河岸場問屋の私船**を**下船**と呼び、**年貢米**は**上船・下船**の半々に積み込まれ江戸へ移送された。[**後略**]

（出典：遠藤 忠（1993）『中川水系 人文』埼玉県、p. 342）

○　大沢橋（境板橋）

『**風**』では、「元荒川」と「境板橋」について、以下のように書かれています。

（（　）内の文字 及び ※の文章は、加藤 幸一氏が加筆しました）

元荒川　宿の乾、大沢町の界を流る、川幅**三十四間余**、往還（日光海道）に橋を架す、境板橋と云、又此川及び瓦曽根溜井にも水除の堤を設く、

※　**境板橋**　境とは、かつては下総国（大沢町側）と武蔵国（越ヶ谷町側）との国境であったことから名付けられたと思われる。現在の大沢橋（大橋）である。

『**風**』では、「**大沢町**」について、以下のように書かれています。

（（　）内の文字 及び ※の文章は、加藤 幸一氏が加筆しました）

○　**大沢町**　　附 持添新田　※越ヶ谷領に属する。

※　持添新田とは、「反高はあるが新田村居の農民が不在の土地」

（秋葉一男氏『見沼の歴史』の見解より）

※　大沢町は、本来は新方領に属する地域であったが、いつの頃か元荒川の対岸の越ヶ谷領に編入されている。

（註１　『郡』及び秦野 秀明は、「**大沢町**」は明治に至るまで一貫して「**新方領**」であったと推定しています（この件に関しましては、後日発表致します））

前宿（越ヶ谷宿）に続て元荒川の南（「北」の誤り）の方をいふ、四隣・丁数自ら前宿と異なれば別に此にの（載）す、東は花田村、西は大房村、北は弥十郎・増林の二村なり、東西十五町余、南北九町許、家数四百八十一、往来の左右に家並をなせり、検地は元禄の前、元和五年（1619）、寛永六年（1629）の二度、伊奈半十郎（忠治）が糺せし（改め直した）事を伝ふ、是は未だ前宿に属せざる前の事なりや詳ならず、此余、寛延三年（1750）神尾若狭守・曲淵豊後守、安永三年（1774）伊奈半左衛門（忠順）等糾せし（改め直した）新田あり、当所の持添とす、

小名　上宿　中宿　下宿　高畑　鷺後

元荒川　町の西南を流る、

○　**池七ヶ所**　何れも小池にて、浅間池・内池・外池・八郎兵衛池・蜆池・観音坊池・嘉右衛門池といへり、

※　これらの池は、かつて元荒川が流れていた（時に造られた）押堀の跡と思われる（秦野 秀明氏）。

⑬　本陣跡・鷹番小屋跡：旧埼玉郡 大沢町

越谷市内において、「**鷹番小屋**跡」の正確な位置が特定可能な場所は、管見の限り「**旧大沢町**」のみです。

※　「**旧登戸村**」には、「**屋号**」が「**たかばん**（漢字表記は不明）」という家が存在します。

『**馬**』では、「**鷹番屋敷**」について、以下のように書かれています。

（『**越谷市史 第四巻 史料二**』p. 184）

六十三　鷹番屋敷

表壱間壱尺弐寸　**屋敷**弐畝六歩　御水帳面

一裏弐間弐尺　**御鷹番屋跡**　町中

竪五拾三間

むかしハ**鷹番屋敷**ニ**鷹番屋**建置、**御鷹御捉飼**之節ハ右**番部屋**ニ**鳥番**をいたしたるもの成べし、則御高札之表、

鷹番之儀自今相止申候、然上ハ村中之者とも弥ゝゝ常ゝゝ無油断心をつけ、うたがわしき者有之ハ急度可相改之、若此已後**鳥を取候者**有之時、不相改候ハゝ其村之名主ハいふにおよハず、村中之者とも迄越度たるへし、其上又ゝゝ**鷹番**可申付者也、

享保六年七月

如此有之候得ハ**鷹番**といふハ**鳥を取候殺生人**の**番**をいたしたる物か、然所**鷹番**いたしたる事難義ニ付御免ニなりし事哉、**鷹番**とハ**鷹の鳥番人**の事也、享保五子年中惣百姓取極メニハ新金壱分弐朱とあり、是地代なり、其後同号八卯年より御年貢ニなる当町嶋根伊右衛門前の野道則**鷹番敷**なり、宝暦七丑十一月中弘福院の大門の所是野道也、此之道を農人通行いたし弘福院境内ヲ通りぬける難義ニおもひ、惣百姓へ弘福院より証文差出し**鷹番敷**を農業道にしたり、尤**鷹番**入用之節ハ相返し可申筈、御年貢ハ同院より上納する也、名主理兵衛の代なり、

（下げ紙）

「　　覚

一御留場村ゝゝ**鷹番**の義ハ、自今以後ハ**鳥番**と唱可申旨被仰出候間、各御支配所村ゝゝニ早ゝゝ申触、尤最寄之私領方ニも名主方ゟ右の旨申通候様ニ御申触可被

成候、以上

享保二年　　飯 田 八 平

酉八月廿三日　　原佐一右衛門

高 井 武 助

田 口 勘兵衛

差上申一札之事

御鷹場并**御捉飼場**村〻〻**鳥番人**之義、昼夜相勤候哉之旨御尋ニ御座候、最初昼夜相勤候様被仰付、其後ハ昼斗相勤メ夜番ハ相止メ可申候、

御鷹場御支配届廻り方ゟ被申渡候ニ付、夫故昼斗相勤申候、尤只今ハ**鳥番屋**相止メ申候、右之趣相違無御座候、依而如件、

享保九年　　二郷半領川富村

名主市 兵 衛

新方領大沢町

吉兵衛参り差上申候、　　名主孫 兵 衛

越ヶ谷町

名主九右衛門

神明下村

源 兵 衛」

『猫』では、「**大房道**」と「**御鷹部屋敷**」について、以下のように書かれています。（『**越谷市史 第四巻 史料二**』p. 85）

一**今大房道**ハ古来**御鷹部屋敷**也、古来ハ右之所ニ**鷹部屋**有之、御鷹繋申候由、享保七年ゟ**部屋**御取払明地ニ成申候、其後**弘福院前野道**と替地ニ成、**今大房道**といふ、

『猫』では、「弘福院」と「鷹（部）屋敷」について、以下のように書かれています。（『越谷市史 第四巻 史料二』p. 89）

一真言宗弘福院ハ慶安之頃迄今云観音池上之在住金剛
院門徒、今之町並へ出境内除地頂戴、右池廟所等支
配す、明和末法流開基色衣地となる、境内観音堂七
月十日群集、今右寺大門通ハ皿沼通大房道也しを町
中持鷹部屋敷を寺ニ而買取替地ニ差出、鷹屋敷を野
道ニし野道を寺大門道ニ致候、宝暦丑十一月為取替
致証文候連名左之通、

間口壱間弐尺二寸
鷹番屋敷裏壱間弐尺
奥行五十三間
野道巾壱間四尺　堀端道横巾壱間
長五十三間　立廿五間

右尺数多其上堀端道有之ニ付、寺ゟ金弐両替料差出申
候、

宝暦七丑年十一月　大沢町百姓

［後略］

『馬』では、「弘福院」と「大門敷」について、以下のように書かれています。（『越谷市史 第四巻 史料二』p. 139）

廿五　〇弘福院

一［前略］
右弘福院今の大門敷之所ハ一体野道なり、此道を農
業之者共肥其外不浄之物を荷ひ通行被致候を、時之
住職是をうれふて、鷹番敷与内ゝゝ惣百姓中と替地ニ
いたし置野道ニ不用、尤鷹番敷入用之節ニ至り候へ
ハ何時ニても明渡可筈なり、

○　「横シ込」という地名

地名である「横シ込」の「シ」は、「強意」の働きをする「副助詞」の「し」と推定されます。

『猫』では、「横シ込」の地名ついて、以下のように書かれています。

（『越谷市史 第四巻 史料二』p. 82）

一　横シ込ハ元和度之名にあらず、往古ハ横道筋ハ村往還通也、
寛永中日光道中ニ相成宿場相闕ケ、
高畑筋之内へ慶安年中葛西用水筋御堀渡有之候而ゟ、
村内下総往還通ハ、却而日光道ゟ横道ニ成、
新堤手前込合候所ゆへ横シ込と云、

「利根川」と推定される「大河」（「天神社跡」の項で詳しく述べます）が、「大沢町」の「元郷」に相当する集落を、凡そ西から東へ流れていた時代には、その「大河」の左岸と右岸の自然堤防上に「村往還（右岸側は後の「下総往還」）」が通っており、寛永年間に「日光道中」が整備され、慶安年間に「葛西用水」が高畑（旧大沢町 新田）に開削されると、凡そ南から北へ通る「日光道中」が主要道になり、「葛西用水」の開削後に出来た「新堤」手前は、「横道」になってしまった「下総往還」と「日光道中」が横から「込合」所になったので、その付近の地名が「強意」の働きをする「副助詞」の「し」を付けた「横シ込」になったと推定されます。

（秦野 秀明の新説）

※　「し」副助詞

「接続」体言、活用語の連用形・連体形、副詞、助詞などに付く。「強意」

「雪降る夜よはすべもなく寒くしあれば」［「訳」は省略］

（出典：『万葉集』八九二）

「名にし負はばいざ言問(ことと)はむ」［「訳」は省略］

（出典：『古今集(こきんしゅう)』羇旅(きりょ)・『伊勢物語』九）

参考　「係助詞」「間投助詞」とする説もある。

中古以降は、「しも」「しぞ」「しか」「しこそ」など、

係助詞を伴った形で用いられることが多くなり、

現代では「ただし」「必ずしも」「果てしない」など、

慣用化した語の中で用いられる。

（出典：「学研全訳古語辞典」https://kobun.weblio.jp/content/%E3%81%97）

※　20 世紀の「流行歌」の「歌詞」の中では、副助詞「し」が「慣用化した語」の中で用いられていましたが、21 世紀の「流行歌」の「歌詞」の中では、もはや、副助詞「し」が「慣用化した語」自体で用いられなくなってしまったようです。

「大都会」クリスタルキング（1979）

作詞：田中 昌之 作曲：山下 三智夫

あー果てしない　夢を追い続け　あーいつの日か　大空かけめぐる

「ハナミズキ」一青 窈（2004）

作詞：一青 窈 作曲：マシコ タツロウ

薄紅色の可愛い君のね　果てない夢がちゃんと

「果てない空」嵐（2010）

作詞：ＱＱ 作曲：ＱＱ

果てない空がそこにあるって　いま確かな声が聞こえる

⑭　東武劇場跡：旧埼玉郡 大沢町

大正十四年（1925）、落成。昭和三十二年（1957）、火災で焼失。

ご興味のある方は、以下の「NPO 法人越谷市郷土研究会」のホームページをご参照下さい。

原田 民自（2007）「大沢町の娯楽の殿堂「東武劇場」」

http://koshigayahistory.org/a-23.pdf

⑮　問屋場跡・脇本陣跡：旧埼玉郡 大沢町

Ａ　「越ヶ谷宿」の名主・問屋

①当初は「問屋を兼ねた」四人の名主

越ヶ谷町の本町、新町、中町の各名主三名

（本町の会田 八右衛門）

（中町の会田 五郎兵衛）

大沢町の名主一名

（江沢 太郎兵衛）

②後に「二ヶ所の問屋場」

越ヶ谷中町の会田 五郎兵衛大屋敷

「マツモト洋品店」（四ツ目屋浜野家）の道路反対側

「喜久屋クリーニング」南隣から道路にかけて

大沢町の江沢 太郎兵衛大屋敷

「若松屋印刷」南隣の「中田絵画教室」及びその南隣。

Ｂ　「越ヶ谷宿」の本陣・脇本陣の推移

①　安永二年（1773）まで

本陣（一軒）

越ヶ谷町の会田 八右衛門（名主・問屋・本陣の三役を兼務）

→「商工会駐車場」周辺

※会田八右衛門家は、没落後、「北名主屋敷」と称する。

脇本陣（二軒）

越ヶ谷町の「四ッ目屋」（浜野 次郎右衛門）

→「木下金物店」南隣の「マツモト洋品店」周辺

大沢町の「大松屋」（福井 権右衛門）

→「福井家」の地

（出典：『御用留』（大沢福井家蔵）

越谷市史編さん委員会編（1972）『越谷市史 第四巻 史料二』

越谷市　p. 218-222

越谷市編（1975）『越谷市史 第一巻 通史上』越谷市 p. 571

② 安永二年（1773）から安永九年（1780）まで

本陣（臨時）（一軒）

越ヶ谷町の会田 八右衛門が没落

大沢町の「照光院」（臨時の本陣）

（出典：同①「安永二年（1773）まで」）

③安永九年（1780）から

本陣（一軒）

○ 大沢町の「大松屋」福井 権右衛門

（出典：同①「安永二年（1773）まで」）

脇本陣（二軒）

○ 大沢町の「虎屋」（山崎 次兵衛）

→「八木橋学習会」の南隣で、「生そば三枡屋」周辺

○ 大沢町の「玉屋」（深野 彦右衛門）

→「深野造園」の北隣周辺

（出典：『馬』p. 179）

（出典：加藤 幸一「越ヶ谷宿の名主・問屋と本陣・脇本陣」）に加筆

⑯ 照光院・天神社跡：旧埼玉郡 大沢町

「照光院」について、『風』では宗派は新義真言宗（しんぎしんごんしゅう）、（旧）三之宮村（さんのみや）一乗院（いちじょう）の末、梅花山の山号、本尊は不動明王であり、鐘楼（しょうろう）に懸（か）けている鐘は安永八年

（1779）六月鋳造であることが書かれ、『郡』でも宗派は**新義真言宗**、（旧）三之宮村**一乗院**の末であることなどが書かれています。

『**猫**』により租税の免除された「除地」であることが判ります。

「**三郡送り大師**」**二十八番**

※　文化二年(1804)「**武蔵国八十八ヶ所**」として開創。
　　明治十七年(1884)より「**三郡送り大師**」。

○　享保六年（1721）文字**庚申塔**
　　宝永三年（1706）光明真言曼陀羅塔
　　安永八年（1779）鐘供養塔
　　万治元年（1658）一石**六観音**菩薩像塔
　　承応元年（1652）一石**六地蔵**菩薩像塔
　　天保十二年（1841）筆子建立墓塔
　　文政三年（1820）筆子建立墓塔
　　文政五年（1822）福井 猷貞の墓塔（出典：『石仏』）

「天神社」について、『**風**』では本地仏は**十一面観音菩薩であり**、土人鉈作の尊像であることが書かれ、『**郡**』では「菅原 道真」が祭神であることなどが書かれています。

「妙義八幡合社」、「稲荷社」、「氷川社」、「閻魔堂」について、『**風**』では名称のみが書かれ、『**郡**』では書かれていません。

『**猫**』では、「照光院」の移転前の場所について、以下のように書かれています。（『**越谷市史 第四巻 史料二**』p. 89）

「**正保年中（1645～48）**まで**浅間池上袴摺**ニ在住、其後**今之所**へ境内移申候由、」

※　「**仮本陣跡**」で、「**大沢小学校（前身）跡**」でもあり、「**福井 権右衛門 猷貞の墓塔**」、「**大沢町**」と刻まれた**最古**の「金石文」である**万治元年（1658）十月吉日**「**一石六観音塔**」があります。

○　天神前橋跡（「利根川」と推定される大河の跡）

「利根川」と推定される「大河」の「川幅」は、「百五十間（270 メートル）」程もありました。「大河」を「利根川」であったと推定することができる理由は、埼玉県内で「河畔砂丘」を造った河川は「利根川」のみであったからです。

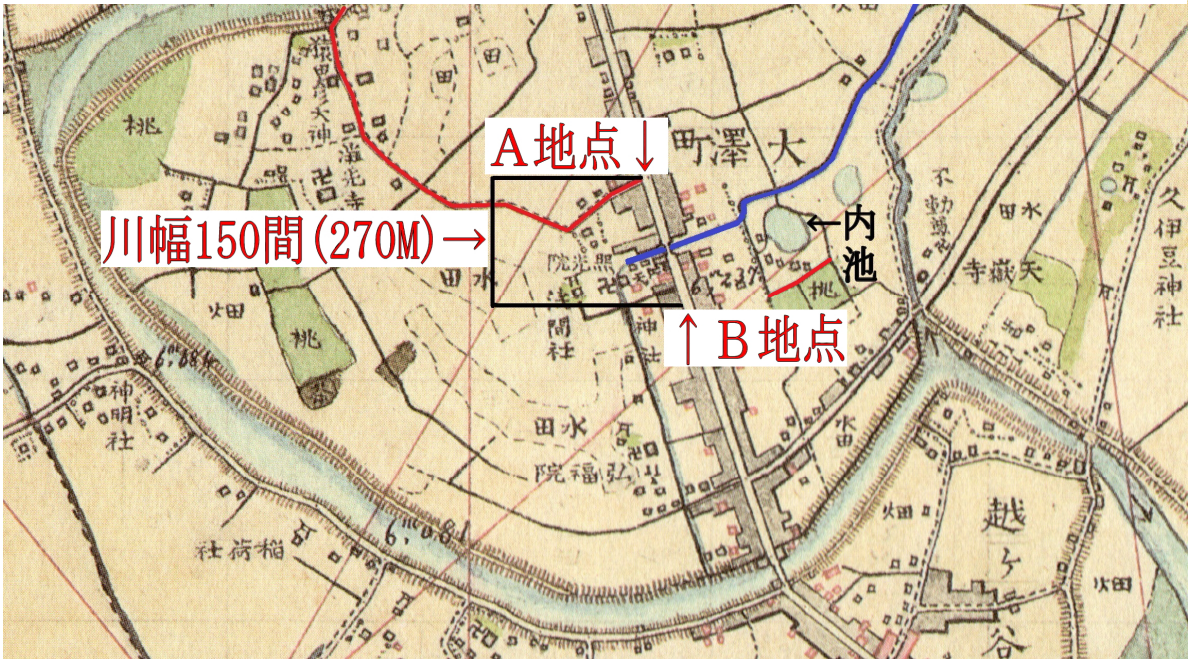
昭和二十二年（1947）九月の「カスリン台風」において、旧大沢町で水没を免れた「数少ない」場所である「日光道中」上の「２つの地点」である「A地点」と「B地点」は、「利根川」と推定される「大河」が造った「北越谷河畔砂丘Ⅰ」、「北越谷河畔砂丘Ⅱ」から下流部へと続く「自然堤防」で、それぞれ「A地点」が「左岸」、「B地点」が「右岸」であったと推定することができます。

「利根川」と推定される「大河」の造った左岸の「自然堤防」とみられる「A地点」の標高は、6,0 メートルで、右岸の「自然堤防」とみられる「B地点」の標高も、6,0 メートルです。また、「利根川」と推定される「大河」の「推定河道部」である「天神前橋」跡の標高は、5,1 メートルです。

この左岸の「自然堤防」とみられる「A地点」と、右岸の「自然堤防」とみられる「B地点」の「距離」が、「利根川」と推定される「大河」の「川幅」に相当し、この「川幅」が、「百五十間（270 メートル）」程もあったと推定することができます。

※　昭和二十二年（1947）九月の「カスリン台風」における
旧大沢町罹災人口　5,989 人
床下浸水　653 戸
床上浸水　436 戸（註１）

※　（註１　出典：吉本 富男（1993）『中川水系 人文』埼玉県 p. 596）
（出典：秦野 秀明（2017）「大沢宿の歴史を学ぶまち歩き」）に加筆



⑰　光明院：旧埼玉郡 大沢町

『**風**』では宗派は**新義真言宗**、（旧末田村**金剛院**の末、**香取山**の山号、本尊は**十一面観音菩薩**であり、「**薬師堂**」があることが書かれ、『**郡**』でも宗派は**新義真言宗、明治二年**から**西京智積院**の末であることなどが書かれています。

「**三郡送り大師**」二十九番

※　文化二年(1804)「**武蔵国八十八ヶ所**」として開創。
　　明治十七年(1884)より「**三郡送り大師**」。

○　不詳　『塩かけ地蔵』石仏
　　享和二年（1802）春暉庵一樹の墓塔
　　寛文十年（1670）地蔵菩薩像付き念仏供養塔（出典：『石仏』）

『**馬**』では、「**春暉庵 一樹の墓**」ついて、以下のように書かれています。
（『**越谷市史 第四巻 史料二**』p. 205）

二百廿六　○**春暉庵**之墓

光明院江沢氏墓所の東の方後ニあり、**遠州流生花**の**師**
と云、此**一樹**は日光道中幸手辺ニ居住せし者なりとぞ、

然ルニ、当町**上組**に**髪結**渡世ニて俗名**永蔵**といふ者あり、
此者右**春暉庵之弟子**ニて**春ゝゝ庵一無**といふ也、**一樹**年
回之節此碑を建立ス、**永蔵**ハ元武士の浪人のはし、後
ニ古主に帰り再勤ニおよぶ、今此辺のさし花、**遠州流**
は皆是**髪結永蔵**の流なり、

碑裏ニ享和二戌二月　**春暉庵門人**

春ゝゝ庵一無門人と彫刻有

⑱　大沢香取神社：旧埼玉郡 大沢町

『**風**』では**光明院**が**別当**であり、**大沢町**の**鎮守**としての「**香取社**」であることが、『**郡**』では「**経津主命**」が祭神で、**応永**年間に勧請されたことなどが書かれています。

『猫』により租税の免除された「除地」であることが判ります。

越谷市指定文化財「**本殿彫刻**」、「二之鳥居（文政六年（1823）建立）」にある「**高低測量几号**」、「**大澤町**」と刻まれた**二番目に古い**「金石文」である**天和二年（1682）十二月吉日**「**手水鉢**」があります。なお、この「**手水鉢**」は、「**西新方**」と刻まれた越谷市内**二例目**の貴重な「金石文」でもあります。

○　文化八年（1811）敷石供養塔

文化十一年（1814）敷石供養塔（出典：『石仏』）

○　「高低測量几号（几号水準点）」

ご興味のある方は、以下の「NPO 法人越谷市郷土研究会」のホームページをご参照下さい。

秦野 秀明（2010）「大沢香取神社の二之鳥居にある「天満宮」の扁額の謎」
http://koshigayahistory.org/75.pdf

○　大沢香取神社の「西新方」と刻まれた「手洗鉢」

于□**天和二戌年**

十二月吉日

奉寄進

天神宮御寶前

武州**西新方**之内

大澤町

田口彦四郎

※　□は「日」と「乏（之）」を合わせた**作字**で、「眨」に似ているが、**目**遍ではなく**日**遍で書かれている。「于□」で、「このとき」と読むのであろう。

※　天和二年は、1682 年である。

※　「**西新方**」の文字は、下間久里の不動堂の境内地にある寛文五年（1665）十月造立の「**観音像付き百堂巡礼塔**」にも見られる。

（発見：秦野 秀明・解読と解釈：加藤 幸一）

○　「本殿彫刻」

ご興味のある方は、以下の「NPO 法人越谷市郷土研究会」のホームページをご参照下さい。

加藤 幸一(2013)「大沢香取神社の彫刻」

http://koshigayahistory.org/389.pdf

⑲　「往古奥州道」であると推定した「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」

往古奥州道、千代田御城下ゟ千住秋屋の里、大原通、八条堤通、南百角ゟ西方、中町横町ゟ元荒川渡り**押立堤**通り、大里古往還間久里粕壁橋手前ゟ百間通り幸手入、御成道迄川付堤通り往還ニ而有之由、又一筋ハ千住ゟ舎人道・鳩谷・大門・岩付・上高野台通りも有之由、いずれ往古之義不相分候へ共御入国後も千住ゟ八条通南百西方中町横丁へ通り来候、日光山　御遷葬之後千住ゟ中町橋迄之

道筋ニ相成申候、

（出典：『瓜』『越谷市史 第四巻 史料二』p. 45）

追記　「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」の終焉

明治三十年（1897）になると、当時「**越ヶ谷町外一ヶ町組合**」**町長**であった「**かしわや**」の当主**松沢 久次郎**は、「東武鉄道」線路敷設についての請願書を、関係町村の代表者と連名で内務省に提出し（57）、さらに、開業時の「東武鉄道」の駅を誘致するために、「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」沿いに所有していた自らの土地を含む多くの土地を、「東武鉄道」に対して寄附を行った（58）。明治三十二年（1899）八月二十七日、その寄附行為は結実し、「東武鉄道（現・東武鉄道伊勢崎線）」の「越ヶ谷駅（後に「武州大沢駅」を経て「北越谷駅」）」が開設された。しかし、皮肉にも「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」と、「東武鉄道」の線路が交差する位置が、開設された「駅」に近過ぎたために、道は線路を挟んで事実上東西に分断される結果となってしまった（59）。この時点で、「**大房道 辻皿沼野道**」、別名「**大房村浄光新道**」の「往来」としての役割は完全に終焉し、往古の「**奥州道**」であったと推定される栄光の歴史をも含めて、やがて完全に忘れ去られることになったのである。

（57）「明治三十年六月 **東武鉄道線路敷設に付請願書**」

（『土木部特許事業』「埼玉県立文書館」蔵）

越谷市史編さん委員会編『越谷市史 第五巻 史料三』1974 p. 206, 207

（58）「**旧土地台帳**」に明記。

（59）昭和四十六年（1971）五月三十一日以前まで、越谷市大沢三丁目三番地付近と、北越谷二丁目十九番地付近を連絡する、「東武鉄道伊勢崎線」の「第四種踏切（踏切警報機や遮断機が設置されていない）」が存在した（「営団地下鉄（現・東京地下鉄）日比谷線」の八両編成化のため、「北越谷駅」の島式プ

ラットホームの北千住駅方面への延長がなされ、それに伴い廃止される)。[**後略**]

(出典：秦野 秀明 (2011) 「往古奥州道と押立堤について」
会報『**古志賀谷**』第16号)

○ 東武鉄道「北越谷」東口で解散 午後０時頃

附属史料

○ 「越ヶ谷宿」の「本陣・脇本陣」の「史料」

※ 大沢町の「虎屋」（山崎家）の史料

「虎屋」は、「江沢太郎兵衛大屋敷」より往還を挟んで斜め向かい側(江戸側) に位置（『**猫**』p. 93)

「虎屋」の「屋敷名（株名）」は、「**門（紋）十郎**屋敷」（『**猫**』p. 108)

享保以後、川上家、山崎家で、両家で**半軒ずつ**所持（『**猫**』p. 108)

山崎伊兵衛：元禄後に、何方より大沢へ来る(『**猫**』p. 108)

山崎伊兵衛の倅である山崎伊右衛門：延享中に、「年寄」相勤 (『**猫**』p. 108)

山崎伊右衛門の養子である山崎治兵衛（阿波出生）：「年寄」相勤
(『**猫**』p. 108)

山崎治兵衛の養子である伊左衛門：「年寄」相勤、安永之末より、「**脇本陣**」
(『**猫**』p. 108)

※虎屋（山崎）伊兵衛：宝暦七年十一月、（『**猫**』p. 90)

※とらや（山崎）次兵衛：安永九年、「**脇本陣**」被仰付候（『**馬**』p. 179)

※とら屋（山崎）次兵衛：安永十年、「**御宿**」（『**留**』p. 224)

※虎屋（山崎）次兵衛：天明六年、（『**留**』p. 295)

※（山崎）伊左衛門：文化十三年、「**脇本陣**」(『**越谷市史研究報告**』p. 147)

※（山崎）伊左衛門：文政元年、「**脇本陣**」(『**越谷市史研究報告**』p. 147, 148)

※　大沢町の「玉屋」（深野家）の史料

「玉屋」は、「江沢太郎兵衛大屋敷」より一軒を挟んで隣り側（江戸側）に位置（『猫』p. 93）

「玉屋」の「屋敷名(株名)」は、「深野所左衛門屋敷」（『猫』p. 114, 115）

深野所左衛門：寛永十三年死去（『猫』p. 114）

承応の頃、深野彦右衛門、深野所左衛門（「町人」）で、両家で半軒ずつ所持（『猫』p. 114）

※深野彦兵衛：宝暦七年十一月、「年寄」（『猫』p. 90）

※深野所左衛門：宝暦七年十一月（『猫』p. 90）

※玉屋（深野）彦右衛門：安永九年、「脇本陣」被仰付候（『馬』p. 179）

※玉屋（深野）彦右衛門：安永十年、「脇本陣」（『留』p. 224）

※槌屋（深野）所左衛門：安永十年、「御下宿」（『留』p. 225）

※玉屋（深野）久次郎：天明六年、（『留』p. 229）

※槌屋（深野）所左衛門：天明六年、（『留』p. 229）

※（深野）彦右衛門：文化十三年、「脇本陣」（『越谷市史研究報告』p. 147）

※（深野）彦右衛門：文政元年、「脇本陣」（『越谷市史研究報告』p. 147, 148）

※（深野）所左衛門：文化十三年、「大旅籠」（『越谷市史研究報告』p. 147）

※（深野）所左衛門：文政元年「大旅籠」（『越谷市史研究報告』p. 147, 148）

④　文化十五年（1818）二月廿日『御用留』（大沢福井家蔵）

本陣（一軒）

大沢町の「大松屋」（福井）権右衛門

脇本陣（二軒）

大沢町の「虎屋」（山崎）伊左衛門

大沢町の「玉屋」（深野）彦右衛門

（出典：越谷市史編さん委員会編（1973）『越谷市史 第三巻 史料一』越谷市 p. 589-601

越谷市編（1975）『越谷市史 第一巻 通史上』越谷市 p. 877

※『越谷市史一』878 頁の「**諸国道中商人鑑**」の中に「**脇本陣**」として、「**つちや所左衛門**（深野所左衛門）」の名前がある。

→「**つち屋**」の場所、「**深野所左衛門**屋敷」半軒

当時、「御用宿勤めを拒否をしていた宿屋」が**脇本陣**であったか否かは不明。

⑤ 天保十一年（1840）九月頃 江沢昭融『大沢町古馬筥』

本陣（一軒）

大沢町の「大松屋」（福井）権右衛門

脇本陣（二軒）

大沢町の「とらや」（山崎）次兵衛

大沢町の「玉屋」（深野）彦右衛門

越ヶ谷町・本町組の「四ツ目屋」（浜野）（※ 越ヶ谷宿本陣の頃）

大沢町・中宿の「佐野屋」（**内藤**）伝左衛門（1）

※ 註（1）（『**留**』p. 229）に「佐野屋」（**内藤**）伝左衛門の記載あり。

（出典：越谷市史編さん委員会編（1972）『越谷市史 第四巻 史料二』越谷市 p. 179

⑥ 天保十四年（1843）前後に成立の『宿村大概帳』

本陣（一軒）

大沢町の「？」（閲覧していないため、不明）

脇本陣（四軒）

大沢町の「？」（閲覧していないため、不明）

大沢町の「？」（閲覧していないため、不明）

大沢町の「？」（閲覧していないため、不明）

大沢町の「？」（閲覧していないため、不明）

（出典：杉山 正司（2015）「「五街道分間延絵図」と「宿村大概帳」の制作」『郵政博物館 研究紀要』第 6 号 p. 138）

○　「鷹場」

※　公儀鷹場　拳場（691ヶ村）

葛西筋（223ヶ村）・戸田筋（72ヶ村）・中野筋（81ヶ村）・
目黒筋（110ヶ村）・岩淵筋（137ヶ村）・六郷筋（78ヶ村）

（出典：『江戸御場絵図』）

葛西筋八条領

越谷市内（西方村・東方村・見田方村・南百村・四条村・別府村・
千匹村・麦塚村・伊原村）

※　紀伊家鷹場

鳥見役 会田 平左衛門の担当地域（25ヶ村）

南部領（14ヶ村）　下野田村・玄蕃新田・高畑村・中野田村・代山村
寺山村・染谷新田・加田谷新田・上野田村・辻村
大崎村・間宮村・北原村・戸塚村

見沼領（1ヶ村）　片柳村・

赤山領（2ヶ村）　久左衛門新田・藤兵衛新田

越ヶ谷領（3ヶ村）　大間野村・七左衛門村・越巻村

八条領（3ヶ村）　蒲生村・登戸村・瓦曽根村

岩槻領（2ヶ村）　**四町野村**・谷中村

（出典：「享保十年（1725）紀伊殿御鷹場村々石高覚（文書番号810）」
『会田落穂集』）

※　「**村の一部**」が**紀伊家鷹場**と書かれていますが「出典」が不明。

西方村・伊原村・西新井村・神明下村・越ヶ谷宿

（出典：『越谷市史 第一巻 通史上』p.672,673）

○　「越ヶ谷宿」草創期の年表

建長元年（1249）「**建長板碑**」が建立されました。

古志賀谷氏（「千葉氏大系図」）よる建立の可能性があります。
文和二年（1353）「**新町八幡神社**」の「ご神体」であった「板碑」が建立されました。
嘉吉二年（1442）「**神明市神社**」が創建されました。（出典：『**風**』）
天文四年（1535）「**久伊豆神社**」が勧請されました。（出典：『**風**』）
文禄年間（1593～96）「**六斎市（二七市）**」が始まりました？
慶長五年（1600）「関ヶ原の戦い」。
慶長六年（1601）東海道に「**伝馬制**」が敷かれました。
慶長七年（1602）中山道に「**伝馬制**」が敷かれました。
慶長八年（1603）江戸幕府を開府しました。
慶長九年（1604）増林の「**茶屋御殿**」が、**会田出羽家**屋敷地に移され、「越ヶ谷御殿」と呼ばれました。
慶長九年（1604）「東海道」、「中山道」に、「一里塚」を設けることを令しました。
慶長十二年（1607）「道路堤防橋梁の制」慶長十二年令を令しました。
慶長十三年（1608）徳川家より会田出羽家が後の「中町」に、一町歩ほどの畑地を賜りました。
慶長十七年（1612）「道路堤防橋梁の制」慶長十七年令を令しました。
越ヶ谷に**大沢 忠次郎基雄**が奉行として派遣されました。
代官の**杉浦 五郎右衛門**が**大沢村**住人 深野・内藤に「**町人役**」を任じました？
慶長十九年（1614）秋田藩の梅津政景が、後の「日光道中」を通行したとみられます。
元和元年（1615）「武家諸法度」元和元年令により、「参勤交代」の制度が始まりました。
元和二年（1616）徳川家康が没し、駿河国「久能山」に埋葬されました。
「伝馬継立制度」の開始により、粕壁宿、杉戸宿、幸手宿、栗橋宿が成立しました。

越ヶ谷宿も「伝馬継立制度」の開始により成立？
（「越ヶ谷瓜の蔓」では元和三年成立説）。
日光道中の**越ヶ谷村**の「**伝馬制**」開始を、元和二年としています。
「元和弐年御他界、日光山へ御遺骨納めしより御伝馬勤めたる事、疑いなし」
（出典：『馬』）
大沢村は「助郷」として成立？
元和三年（1617）駿河国「久能山」より、下野国「日光山」に改葬し、「日光東照社(後の東照宮)」が創建されました。
「元和年中、日光山へ御遷葬より、日光道中**越ヶ谷村**にて御伝馬継立致居候」
（出典：『瓜』）
「日光山御遷葬之後、千住より中町橋迄之道筋に相成申候」（出典：『瓜』）
それ迄は、「奥州古道」（現中川・元荒川右岸の自然堤防沿いの道）を利用していました。
寛永元年（1624）「日光道中」の初見 （「日光山造営法度」『徳川実紀』）
寛永六年（1629）「荒川」の瀬替えが完成しました。
寛永七年（1630）草加宿が成立しました。
寛永十二年（1635）「武家諸法度」寛永十二年令により、「参勤交代」の制度が本格的となりました。
寛永十九年（1642）「武家諸法度」寛永十九年令により、「参勤交代」の制度がほぼ完備されました。
慶安二年（1649）徳川家綱の「日光社参」が行われました。
慶安三年（1650）**大沢村**は**越ヶ谷宿**の「**合宿**」となりました。
明暦元年（1655）「大橋(後の境板橋・現在の大沢橋)」が、架け替えられました。
（出典：加藤 幸一「平成 27 年 12 月改訂 **越ヶ谷宿の成立**」）に加筆

補足情報

○　「伊豆石」の種類とその用途

［前略］ 伊豆石には二つの種類があります。
一つは安山岩系（硬質）で、もう一つが凝灰岩系（軟質）です。
安山岩系の伊豆石は真鶴石・小松石・根府川石などとも呼ばれ、耐火性に優れ、風化しにくいという特徴が挙げられます。
凝灰岩系の伊豆石は伊豆御影石・伊豆青石・沢田石などと呼ばれ、こちらも耐火性に優れ、軟らかいため加工がし易く、比較的軽いという特徴がありますが、風化しやすいという欠点も挙げられます。
他にも柱状節理でできた六方石（安山岩）と呼ばれる石も採石されています。
伊豆石は、地元では修善寺ハリストス正教会顕栄聖堂の基礎、旧天城トンネルのアーチや側壁部分、伊豆の国市（旧韮山町）にある反射炉の炉体外部で見られ、遠方では江戸城等の修築、品川御台場の建設など、大型施設の建築に利用されました。また、神社の石段や路傍の石仏・石碑、庶民の蔵や塀、家の改築といった日常生活にも必要不可欠でした。［後略］

（出典：伊豆市ホームページ
http://www.city.izu.shizuoka.jp/gyousei/gyousei_detail001185.html）

○　「凝灰質石材画像集（越ヶ谷宿）」について

静岡県産の凝灰岩は二種類に分類しています。
「静岡県産凝灰岩」と「静岡県産石灰質凝灰岩」の二種類です。
実はこの「静岡県産石灰質凝灰岩」が曲者です。
ここに分類した凝灰岩は石灰質の凝灰岩の中でも極く特殊な「白浜附近に産出した特例」を含みますが「淡褐色を呈し、石灰質の生物遺骸（化石細片）に富み、ミルフィーユやパイ生地の様に、その石灰質化石細片が薄い膜状に成層した堆積構造を示しながら固結している凝灰岩」のみを示し、前記の特例を除き

「石灰質でありながら薄い成層構造を示していない凝灰岩」は「静岡県産凝灰岩」に分類しています。

これは調査の実績が増加してきた過程で徐々に判明して来た事ですが、この「静岡県産石灰質凝灰岩」に分類した石材は「礎石類」への採用実績が大変に多く観察されます。
しかも殆どの場合に他の「静岡県産凝灰岩」質石材或いは「箱根溶岩（小松石・根府川石等）」との組み合わせが多く見られます。

ここで「石灰質凝灰岩」と分類した岩石の特徴として、フィールドでは風化すればするほど、風化に拠り生じる凹凸が石灰質の生物遺骸化石細片を浮きだたせ、ラミナ構造をより顕著に判別し易くなり、全体が黒く汚れたり、表面に地衣類や蘚苔類が着生しても石灰質の化石細片が浮き出て容易に観察出来る様になる唯一の石材である事が指摘されます。

「静岡県産凝灰岩」質石材に分類した石材には、伊豆半島で採掘され利用されてきたあらゆる種類の「凝灰岩」質石材が含まれており、例えば石垣間知石等に採用されているものだけでも「珪質の緑色凝灰岩」から、礫径の変化に富む淡緑色の「礫混り緑色凝灰岩」があり、中には「石灰質の砂岩」も含まれるほどに多様です。
これらを正確に分類しようとすれば適当なサイズの試料を入手し、顕微鏡等で観察する必要があり、単純に外観だけでは分類が困難な石材と考えて頂ければ幸いです。

（出典： 赤司 卓也（中央博サークル ヒスイの会・
千葉県立中央博物館市民研究員）「凝灰質石材画像集」
PDF 自家製版）

日 本 植 物 斷 報 (其六)

佐 竹 義 輔

Y. SATAKE: Trivial Notes on the Japanese Plants (VI)

29) **こしがやほしくさ**（新種）　↓ ここがポイントです！

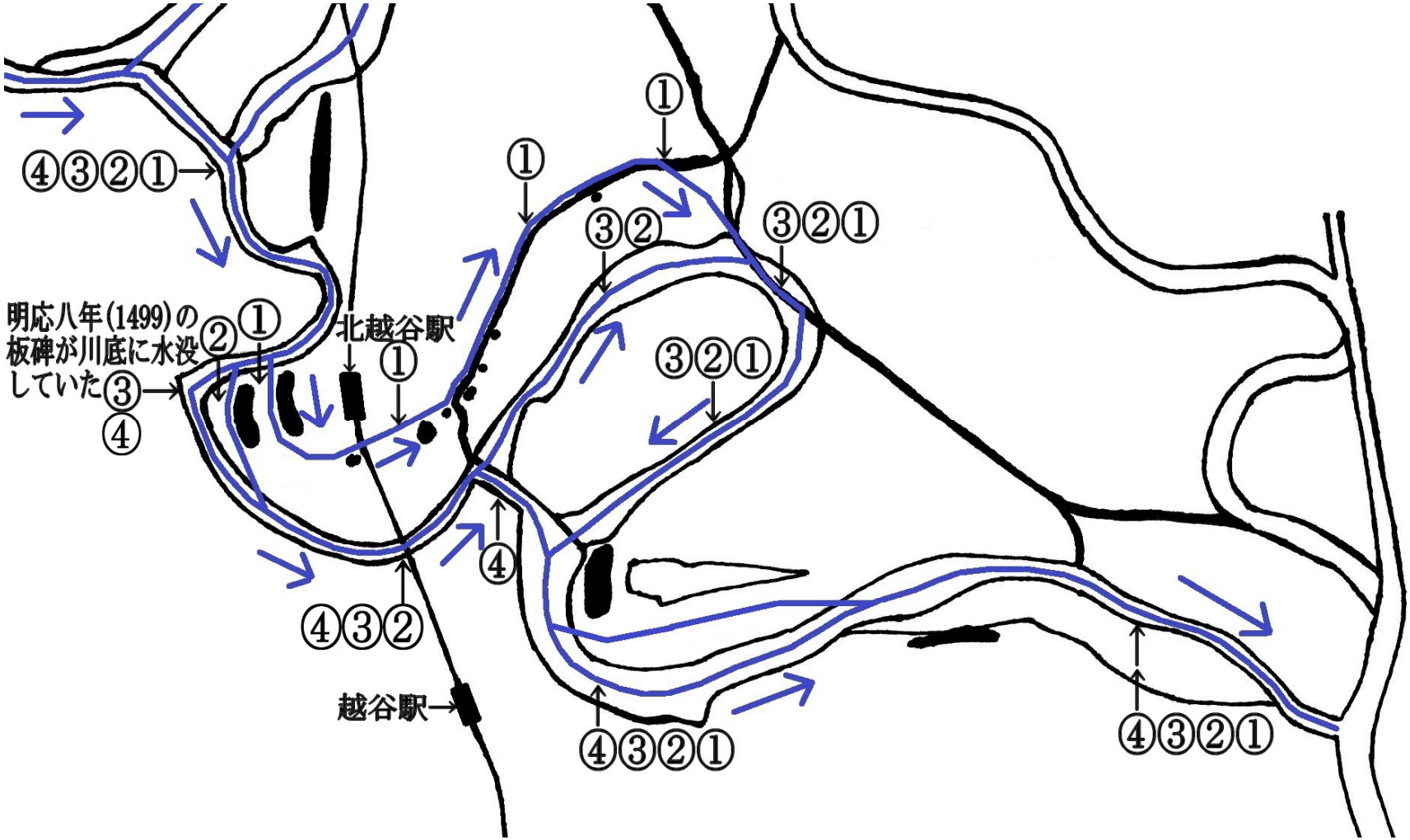
前川文夫氏ガ昨年9月、越ケ谷町附近ノ元荒川ノ砂洲上デ發見サレタ珍種デアル。ソノ時ノ採集品ハ花ガ若カツタノデ 10 月末筆者ガ同地ヲ訪レテ、果實ヲツケタ標品ヲ多數ニ採集シテシラベタ結果、新種ナル事ガ判明シタ。合生莖節ニ屬シテヰルガ、地下莖ガ短太デ、花莖ガ太イ圓筒狀ヲナシテ機械組織カラ成ル肋ヲ有セズ、葯ハ白色ヲ呈スルノデ、他ノ邦産種トハ全ク違フ種類デアル。圓筒狀ノ花莖ノ頂上ニ卵形ノ頭花ヲ載ク樣ガはりゐ屬ノモノニ似タ感ヲ與ヘルノデ *E. heleocharioides* ノ學名ヲ與ヘル事ニシタ。

昭和14年(1939)10月発行
『植物研究雑誌』第十五巻 第十号 33ページ

大正8年(1919)の
「瓦曽根溜井」

昭和13年(1938)9月→→
「コシガヤホシクサ」
発見の推定地
(NPO法人
越谷市郷土研究会の推定)

『埼玉縣北葛飾郡松伏溜井
葛西用水路ヲ経テ
同縣南埼玉郡瓦曽根溜井間現状図』
(大正8年(1919)7月測量製図
鑑定人 木邑 富蔵 坂本 茂一郎)
のうち「第三号の地図」を元に
加藤 幸一氏が作成



↑　元荒川の河道変遷図（作成：秦野秀明）